

第 42 回言語文化教育研究学会月例会

ことばは誰のものか

—日本思想の観点から考えた言語教育—

話題提供者 ロマン・パシュカ（神田外語大学）

「忘れられた思想家」安藤 昌益（1703-1762）は、
彼自身が生きた世の中について「私法世」と「自然の世」と、
大きく二つに分けて論じている。

「私法世」とは、支配者が作り出した「法」の下で封建制度そのものが存在する現実社会のことであり、
「自然の世」とは身分の差別のない、平等な、自然と共生する社会のことである。

昌益は「私法世」を批判し
意味や言語の社会的な
て、「自然の世」と「私法
ると唱えている。

実践している身として
ものなのか」という問
発の点にし、昌益
語の意義を踏まえ
のあり方を問い
たい。

ながら「自然の世」を描写し、その中で学問の質やあり方、言葉の
役割、書くことの意義など、様々なテーマに触れていく。そし
世」との大きな違いの一つは、ことばそのものの存在にあ

日本思想史の研究を、そして言語教育を、両方
の話題提供者には、「そもそも、ことばは誰の
いが自然に生まれた。その問いを再出
が論じる「自然の世」における言
た上で、現在の言語教育
直す必要性を提唱し

日時：5月28日（土）14:00-15:45

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 22号館 206室

参加費：無料

予約：不要（当日、直接会場にお越しください）

問い合わせ：monthly@alce.jp